HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Session6. クマとヒト
Author(s)	大舘, 智志; 城戸, 孝昌
Citation	新ひぐま通信 別冊 : 第7回国際クマ会議報告書, 12-13
Issue Date	1986-08-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91574
Type	report
File Information	session6.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第7回国際クマ会議報告書：12−13（1986）

SESSION Ⅵ. Bears and People
クマとヒト

大館智志
城戸孝昌

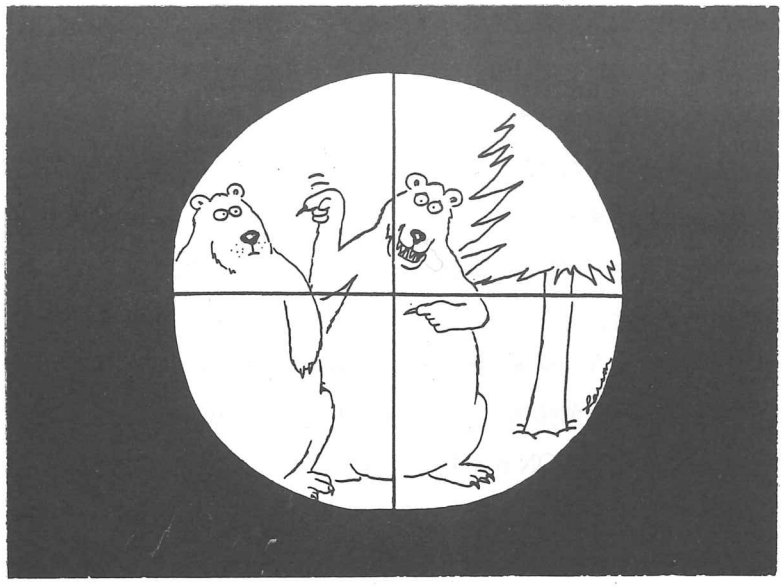
このSESSIONではハイイログマに関するもの5題、アメリカクロクマとホッキョクグマに関するものそれぞれ1題ずつの計7題の発表があった。またテーマとは関係ないが、このSESSIONの始めにパンダの出産シーンのビデオが紹介された。内容は、人間とクマの相互的な影響について論じられ、我々にとって最も身近な問題に焦点を当てたものであった。

北米では、自然に親しもうという姿勢が広く流布しており、多くのハイカーが国立公園等を訪れている。ところがクマ、特にハイイログマが生息している地域の場合、ハイカーとクマの遭遇・接触が問題となっている。このような問題について調査した報告が2題あった。これらの発表は、いつ、どこにクマが活動しており、どのような場所を歩いたらクマとの接触を軽減できるのかについての調査結果を提示したものであった。しかし、人間の方でできるだけ接触を避けようとしても、ある程度の接触は避けられない。そこで、クマをいかにしたら撃退できるか、あるいはクマが近づいてこないようにするにはどのようにしたらいいのかということに関心が生じてくる。ホッキョクグマについて、このことに取り組んだ報告があった。演者らはまずクマを観察地点に餌づけし、そこで警笛を鳴らしたり化学物質をまいたりしてクマの反応を観た。警笛は個体により反応がまちまちであったが、化学物質をまくとクマは有意にその場所を忌避するようになったという。ところが野外におけるこのような類の実験は今までにあまり例がなく、この報告も中間報告的なものであると述べられていた。従ってクマ撃退の最良の方法は発見されておらず、北米でも今なお、危険又は有害とみなされたクマは射殺されるケースが多い。アラスカでは1970年から1984年の間に、狩猟以外で捕殺されたクマ（アラスカヒグマ、ハイイログマ）は688頭にのぼる。S. D. Millerらは、アラスカにおける狩猟以外のクマの捕殺についての実態を報告した。どのような状況でクマが射殺されたかを調べてみたところ最も多かったケースは居住区にクマが出没した場合で、全体の約3割を占めていた。また射殺されたクマの75％が即危険とみなされ、15％が危険をもたらす可能性があるとみなされていた。これら狩猟以外の捕殺と狩猟による捕殺の間には、クマの個体群に与える影響に有意な差はなかった。そして、狩猟以外で捕殺されたクマの性、齢構成を調べたところ、平均年齢は雌雄で差はなかったが若齢クラスではオスが、老齢クラスではメスが多くを占めていたことがわかった。

他に、人間の活動がクマの行動に及ぼす影響について2題発表があった。1つは林道や開発、もう1つは林道を走るトラックの影響についての報告であった。前者では、開発が進む

と、その環境の生産性が低下しクマの収容力が低くなるとの結果を得た。後者では、トラックが林道を走るようになると、クマの活動パターンが、そうでないものと比べ異なってきているのではないかと述べた。しかし、この調査は始まったばかりで結論には達しておらず、今後の成果に期待したい。

「クマとヒト」の問題は、北米では古くから論議され、かつ、研究が進んでいると思われがちであるが、実は北米でもようやく本格的な調査が開始された段階にある。「クマとヒト」の問題は北海道においても重要な問題の１つである。例えば、大雪国立公園内高原沼巡りコース閉鎖事件に代表される人とクマの遭遇事件や、事実上野放しとも思われるヒグマの有害駆除、山林の開発に伴うヒグマの生息域の狭少化などの問題がある。北海道では、人間とクマの活動域は互いにオーバーラップしているところが多く、むしろ北米より「クマとヒト」問題はより身近な問題ではないかと思う。研究者や行政は、この問題解決に先鞭をつけるよう努力して然るべきであろう。



“射つならコイツにしてくれよ……”